「底が突き抜けた」時代の歩き方 306

結婚とか、付き合うとかではなく、子供がほしいの - 映画『ハッシュ！』

「結婚とか、付き合うとかではなく、子供がほしいの」 突然、見ず知らずの女からゲイのカップルに相談を持ちかけられたこの一言から、映画『ハッシュ！』は始まる。もちろん頭のヘンな女から投げかけられた一言と思ってゲイのカップルが無視するなら、この映画は始まらない。このことは、あらゆるドラマは受けとめることから始まるということの意味する筈だ。関係が始まらないことには人々の日常も展開しない。

ペットショップで働く直也（高橋和也）はゲイである自分に忠実に生きる青年で、親にもカムアウトし、ゲイ・スタイルを自然のままに装って、明るく周囲と巧みに融け合い、家庭の幸福などは最初から求めずに、人は一人であることを明確に自覚している。直也と付き合っている勝裕（田辺誠一）は直也とは対照的に、勤務先の土木研究所でもゲイであることを知られないように暮らしている。周囲にカムアウトしないまま生きている彼はどこか優柔不断で、中途半端にやさしく、両親の冷たい関係の中で育ってきたので、自分の子供にひそかな憧れを持っている。そんな二人に、というより勝裕に絡んでくるのが、同僚のエミであり、朝子である。

歯科技工士の朝子（片岡礼子）は一人暮らしの寂しさもあって、ちょっと男にだらしくなく、人生にくたびれている。自分にもう頓着しなくなったサボテン女（というらしい）だが、過去二回の中絶から自分の体がぼろぼろになっており、赤ん坊を産めるぎりぎりの年齢に差し掛かっていると思っている。直也と勝裕がソバ屋で食事している時に偶然居合わせた朝子は、彼らの会話から彼らがゲイカップルであることを知る。ソバ屋から出ると雨が降っており、傘を持たずに困っている朝子に、見かねた勝裕が自分の傘を差し出す。後日、新品の傘を持って勝裕の会社を訪れた朝子は、いきなり「結婚とか、付き合うとかではなく、子供がほしいの」と切りだして、彼を面喰らわせる。自分をはっきり主張しないためにやさしくみえる勝裕に惚れていた同僚のエミ（つぐみ）は、その様子を見て勝裕と朝子が恋人同士だと感違いする。

何ごともなく順調に過ごしていたゲイカップルに、降って湧いたように一人の女が決死の覚悟で絡んでき、その絡みに手繰り寄せられるようにもう一人の女も絡んできて、ドラマが哀調を帯びながらコメディタッチで進行していく。同じゲイであっても、生き方がはっきりしている直也に女が近づく隙はない。不器用で自分を常に抑えている勝裕の生き方の輪郭の曖昧さが、揺らめき迷っている女たちをどうしても引き寄せてしまうのだ。実は直也も女が引き寄せられるのと全く同じ理由で、勝裕に引き寄せられたにち

がない。朝子の唐突な申し出に当然勝裕も断るが、彼女の執拗な粘りと気迫に押されてはっきりと断ることができない。自分の恋人の精子をほしがる朝子のあまりもの理不尽さと、朝子の一方的な申し出を一応は敬遠しつつ、その実、子供を持つ誘惑に惹かれている勝裕のいつもながらの優柔不断さに直也は腹を立て、二人に意地悪く当たる。

しかし朝子は諦めず、勝裕は断りきれず、朝子と勝裕のヘンな関係を断ち切ることも、またそんな勝裕に愛想を尽かすこともできない直也の三者の関係はそのまま推移して、しだいに朝子は勝裕の精子でなくとも直也の精子でも構わないと思いはじめようになり、家庭の幸福などとは無縁に生きようとしていた直也のほうも勝裕との生活だけでなく、朝子とその子供を含む生活を視野に入れ始める。そんなとき、軽い障害を負うそんな自分を愛してくれるのは勝裕しかない信じ込むエミは嫉妬に駆られて、勝裕の兄夫婦に直也、勝裕、朝子の三人の関係を手紙に書いて送る。ゲイカップルの直也も勝裕もゲイではない一般社会に対して慎ましく、無作法に踏み込まない注意深さを充分弁^{わきま}えているのに較べて、朝子といい、エミといい、異性愛者たちの露骨なエゴイズムぶりがそこに描かれている。しかし映画では、異性愛者たちが慎重で控え目な同性愛者たちの関係に踏み入るにはそこまでの無遠慮さと露骨さが必要だといわんばかりに、彼女たちのスタンスは肯定的に描かれている。その点もこの映画を秀逸なものにしている。

エミの手紙によって、勝裕の兄夫婦一家と直也の母親が一堂に会することになり、無関係な他人に話しても理解してもらえない直也、勝裕、朝子の三人の関係が一挙に外部の視線に晒されていく。だがそのことによって逆に、これまで押し隠されてきた勝裕の兄夫婦間の亀裂も引きずりだされてくる。兄夫婦の前で勝裕がゲイであることが露呈され（実は兄は弟がゲイであることを昔から知っていた）、朝子との奇妙な関係が審問の対象にされる。朝子は彼らの前で、自分は一人で生きてきたし、これからはずっと一人で生きていこうと思っていたが、直也、勝裕のゲイカップルに出会って、笑ったり、手をつないだり、なにかきれいだなとか、いいなとか、そういうこと、どんどん思えてきて、そんな生き方もあるんだ、と自らの胸中を素直に吐露する。そして彼女が勝裕の精子をもらって赤ん坊を産みたいと核心に触れる発言をし、友達や恋人を選ぶように家族も自分で選びたいといったとき、それまで冷ややかに聞いていた兄嫁の容子（秋野暢子）の憤りが爆発する。

姑に気に入られず苦しんだ妻と、それを無視しつづけた冷たい夫という図式の中で、自分の意に添わない男と結婚してしまった不満を日々の夫婦生活で抱きつづけてきた容子は、エミの手紙に綴られていた朝子の二回の中絶を取り上げながら、あなたは母親にはなれません、子供産んで育てるのはそんなふざけたこととちゃうねんよ、と朝子にむかって容赦なく言い放つ。この家族会議のシーンは、直也、勝裕、朝子の三人の関係に対する一回り上の世代からの非妥協的な批判であり、そこにもう一回りも二回りも上の、いい加減な世間一般を絵にしたような直也の母（富士真奈美）が加わるのとは対照的に、

勝裕の兄は終始寡黙がちである。

自らもゲイであることをカミングアウトしている監督の橋口亮輔は『キネマ旬報』のインタビュー（01年12月下旬号）の中で、「……30代の、仕事をし、自立している人間を取り巻く現実を描くには、親も描かなくちゃ変だし、友人もいなくちゃおかしい。それに、物事を一つの価値観で測ったり、男だ女だというレッテルを貼って語るのは嫌なので、そうではなく描くには、いろいろな価値観を持った、様々な世代の人たちを登場させ、その関係性の中からあぶり出されるように三人が見えてくるほうが自然だと思ったんです」と語っており、家族会議の対立シーンに監督の意図が思い通りに映しだされている。

朝子のエキセントリックな行動に肩入れしたい視線に立つなら、自分の夫婦生活に対する否定的な感情から勝手気ままに見える朝子の無秩序な行動を裁断する容子の非寛容的な態度は、本来なら憎らしく映ってもいい筈なのに、容子の中に世代の枠組みに苦しんできている一人の女が見出されることによって、逆に、直也、勝裕、朝子たち三人の関係の偏差は、世間一般の価値観に隣接している容子や直也の母のまなざしにもっともっと晒されたほうがいいと感じてしまうのだ。つまり、どちらの世代の言い分が正しいかどうかではなく、どうしても対立しあうまなざしに直面したとき、そのまなざしを双方が受けとめ合うことによって、どのような変化を蒙りながら歩いていくのか、ということなのである。

「いつも、心掛けているのは普遍的な物語を作ること。どんな世代の人が観ても、どんな人種の人が観ても、これは自分の中にもある、これはわかる、というものを作りたい。そういう普遍を獲得できれば映画は年月に耐えていくと思うんです」と、橋口監督は続けてインタビューに答えている。「普遍的な物語」は普遍的な場所から生みだされる。彼は直也と勝裕のようなゲイカップルや、朝子のようなサポテン女の社会的位置における偏差そのものから普遍的な場所を作りだそうとしているのだと思われる。異性愛者が多数を占めるからといって、多数派が普遍的な場所をかかえ込んでいるわけではないように、同性愛者が少数派だからといって普遍的な場所から遠ざかっているわけでもない。たぶん普遍的な場所とは関係性に内在するものであって、できるだけ遠い関係性を手許に引き寄せるそこに普遍的な場所が広がりつつあるような気がする。

「ある審判がないと、ドラマとして終われないというか、彼らが彼ら三人の中だけで閉じて、心地いいユートピアを作るようにはしなくなかったの」と同じインタビューの中で語っている彼は、一般社会の中ではけっして理解されない主人公たち三人の理解されなさを大きく浮かび上がらせるために、彼らの関係から最も遠い社会制度的な家族会議のシーンを設定したのだ。理解されなさは当然、衝突を惹き起こす。あなたは母親にはなれません、とにべもなく容子から撥ね付けられた朝子は、言葉を失って身体ごと容子にぶつかっていくが、そのとき容子は自分の生きかたに最大に欠落しているも

のを朝子が体現していることを感じ取っていたし、朝子のほうも実際に子供を生み育ててきている岩盤のような容子にぶつかって、子供を産んで育てるのはそんなふざけたこととちゃうねんよ、という彼女の言葉を重たく噛みしめねばならなかった。

自分の空白感を埋めようとして「子供が欲しい」と思ったわけではけっしてないときっぱりといいきれない分、子供のいない朝子は子供のいる容子の迫力には抗することができなかった。容子たちに出会う前は、直也や勝裕を相手にとり憑かれたようにまっしぐらに突き進んできた朝子はその反動もあって、酷い自信喪失に陥り、直也や勝裕ともしばらく会わずに、アパートに帰るやいなや、へたりこんでしまう日々を過ごす。だが、姿を見せない朝子に直也と勝裕は気に懸ける。当初は二人だけの彼らの関係に強引に割り込んできて辟^{入きえき}易させた朝子だったが、子供を産みだせない彼らの関係に朝子は火を点けたのであり、火を点けられた彼らはもはや後戻りができなくなっていた。それに、勝裕の優柔不断なやさしさが惹き起こしたともみられる家族会議で、三人の関係の度し難さへの理解を真正面から拒もうとする容子から朝子が標的にされて、朝子が一生懸命その無理解さに挑んでいたという負い目が、直也と勝裕にくすぶってもいたのだ。

家の中で一人落ち込んでいる朝子の許を直也と勝裕は訪れる。彼らの訪問に朝子は少し救われた気になるが、しかし、起ち上がった^{ほほほ}彼らを家に招き入れる元気はない。留守と思って帰りがける二人の後ろ姿に朝子は這う這うの^{ほほほ}体で声を掛ける。すると二人は、なんだ、いるじゃんという顔付きで笑いながら、彼女に向き合う。人間の関係にどんな方程式もないんだよ、といった開放感があるとき、彼らの間に満ちあふれる。死の数カ月前にかつての恋人に宛てた手紙の中で、チェーホフはこういつている。「ごきげんよう。なによりも快活でいらっしやいますように。人生をあまりむずかしく考えてはいけません。おそろく^{おつしゅ}ほんとうはもっとずっと簡単なものなのでしょうから」

英語のhush!は、赤ん坊が寝ているときに起こさないように注意する「シッ!」である。今後三人が赤ん坊を持つようになるのかどうかはわからないが、社会が敷き詰めている無数のルールに乗っ掛らずに生きようとしている彼らの関係そのものが、これから産みだされようとする赤ん坊に重なってみえる。映画は朝子を通じて、自分がいいなと思う関係には少し強引でも絡んでいき、関係を更に新たに付け加えていけばいいということ、そして誤解や無視、嫌なことや辛いことは避けるのではなく、全部自分(たちの関係)の中に取り込むことによって、普遍的な場所を目指し、その普遍的な場所で耐えられるなら、世界の重さにも耐えられることを映しだしている。あらゆる関係が始まりを孕んでいるように、ゲイカップルも始まりの予兆に包み込まれており、最も遠い他者を喚び込むことによって、名状しがたい歩行がつづけられていく肩の凝らない速度に、我々も自分の中の赤ん坊を遠く喚び起こそうとする。

2002年5月31日記